森林と人を活かす知恵 137

「豊かな森」って、どんな森？

岐阜県立森林文化アカデミー　准教授●小林　謙一

山間地域のある小学校から「身近な森林の魅力を生徒に伝えたい」という相談を受けました。学校のすぐ近くの森林は子どもたちのお祖父さんやひいお祖父さんたちが植えたスギやヒノキの人工林です。「森の豊かさ」を伝えようと思っていると、都市部から移住した方からは「この辺りの森は、同じ種類の木ばかりで豊かだと感じられない」という感想を聞きました。この方が思い描く豊かな森は、木の実やキノコ、かご編みに使うツルなどが採取できるところのようです。私自身、中山間地に暮らし、田畑をやらせてもらってはいますが、森林というと薪ストーブで木を使うこと以外はあまり接点がありません。そこで、自分にとっての「豊かな森」について、改めて考えを巡らせました。

●森から切り離された現代

移住専門誌『田舎暮らしの本』では毎年「全国住みたい田舎ランキング」を発表しています。このランキングは278項目のアンケートをもとに集計されていますが、「森」についての項目はなく、つながりそうなものとしては「自然公園がある」「里山の保全に力を入れている」など数項目でした。都市部の人々が住んでみたい田舎のなかで、森の豊かさは重要なキーワードではあまりないようでした。

次に、「地域幸福度指標（LWC指標）」の調査結果を見てみます。この指標は国の「デジタル田園都市国家構想」に基づき設定されたもので、市民の「暮らしやすさ」と「幸福感（Well-Being）」を指標で数値化・可視化したものです。

「令和5年度　全国調査結果（※）」によると、「自然環境の因子と幸福度との相関は低い」ことが示され、自然の恵みが生活満足度に必ずしもつながるものではないという傾向もみられました。私としては森が身近にあることが幸福につながると思っていましたが、こちらも、《森》が現代人の幸福度や生活満足度に直接関わっていないことを示唆していました。

●生物多様性から見る森の豊かさ

思考を巡らせていた折、郡上市で行われた生物多様性ネイチャーガイドの坂田昌子さんのトークイベント（主催（一社）長良川カンパニー）に参加させてもらう機会がありました。

「生物多様性とは、単にいろいろな生き物がたくさんいることだと思っている人が多いのですが、さまざまな生き物同士の関係が複雑に絡み合っていることを指します。関係が複雑であればあるほど、その生態系は壊れにくいんです」

生物多様性を支える上で重要だとされている自然環境のひとつに「里山」が挙げられます。里山は人の暮らしの営みを中心に、田畑から草地、森林へとつながる自然環境です。長い年月をかけて育まれた里山では、植物、動物、昆虫など多様な生物が人々の生活サイクルに適応し、まさに複雑に関係しあいながら共存してきました。人々は、木の実やきのこ、山菜を採り、木材は薪、炭にして利活用してきました。豊かな水も大切な恵みであり、身近なものでした。人も含めてたくさんの生き物や植物が複雑に関係し合うこの自然環境は、豊かさを実感できるものであったと思います。

しかし、昭和30年代の燃料革命以降、里山の生活は大きく変わりました。日々使われてきた広葉樹林は建築材料用の針葉樹の人工林に代わり、人々が日常的に森に足を運ぶ機会は減りました。山菜採りに山へと出かけていた世代は高齢化し、その子どもたちや孫たちはほとんど森に足を踏み入れる機会がありません。山水ではなく水道の蛇口から水をいただく現代の生活では、里山でも森林との関連性は薄れ、その豊かさを実感しにくくなっています。

身近な森林の魅力を感じるには、まず関わりを持つことが第一歩です。森林との関わりが生まれると「愛着」が芽生え、行動につながっていきます。観光やレジャーに留まらず、日常生活を通じて森と関わること、特に森林に囲まれた中山間地域で人々が暮らし続けるためには、人と森とのつながりを再構築し、地域住民が森との接点を持つ日常的な機会づくりが求められていると強く感じました。

イベントの翌日、坂田さんから里山の技術「しがらづくり」を教えてもらいました。表面を水が走る《水みち》に、枝でしっかりと組んだ「しがら」をつくって落ち葉を詰めることで、水をゆっくりと浸透させ土壌流出を防ぐ知恵です。ノコギリや剪定バサミなど、誰でも容易に手に入る道具を使い、女性や子どもも森の手入れに参加しました。参加者の一人は「枝を編んでいく作業が楽しい」と黙々と作業に没頭していました。

「しがら」は、かつての里山で日常的に行われていた、身近な資源で行える森の整備なのだと坂田さんは教えてくれました。里山に暮らす人々は、しがらや石積みなど、小さな修繕作業を適宜行い、脈々と紡いで風景を守ってきました。森との関わりが生活の一部となることで、森への愛着は深まり、人々は自分自身も生態系の一員であるという感覚を深めていったことでしょう。

先のデータの結果のように、自然との関わりやつながりが希薄であれば、不便さだけが目につくかもしれません。我が家では風が吹いた時、森一面に落ちる杉葉を拾い、薪ストーブの着火剤にしています。ありがたいと感じる〈つながり〉の中に自分が存在していると実感できるとき、私は幸せを感じています。日々の暮らしに関わる身近な森こそが、私にとって「豊かな森」と呼べる大切な場所なのだと改めて気づくことができました。

森の中で「しがら」を編む

（※）デジタル庁の委託事業において（一社）スマートシティ・インスティテュートが作成（2023年7月）

●詳しい内容を知りたい方は　TEL（0575）35-2525　県立森林文化アカデミー まで